

# 荒城の月

文学部 2 年 杉田純

## 目次

1. 社会認識
2. 理想社会像・問題意識
3. 現状分析
  - 3-1 歴史とは何か
  - 3-2 主な歴史認識問題
  - 3-3 歴史認識問題による人々の対立
  - 3-4 歴史認識問題は国家同士の問題なのか
  - 3-5 歴史認識問題はなぜ問題化しているのか
4. 原因分析
  - 4-1 歴史構築の過程
  - 4-2 歴史構築の恣意性
  - 4-3 パブリック・メモリーとしての歴史
5. 政策
  - 5-1 新歴史科目「近現代史」設置
  - 5-2 教科書検定新条項「戦争被害者の声条項」設置

## 1. 社会認識

現代は成熟化した社会である。成熟化とは産業の高度化とそれによる人々の生活水準の向上のことである。成熟化以前には、まだ人々の物的な欲求が満たされ切れていなかったために、専ら物的充足が求められた。だからこそ、国家は経済成長や技術革新のために邁進することができた。しかし、成熟化が進むにつれて人々の物的欲求が十分に満たされないということは減少し、代わって精神的充足が求められるようになった。そのため、成熟化以前には表面化することがなかった問題が疑問視されるようになった。

成熟化の流れは東アジアにも見られた。日本においては、高度経済成長期が成熟化の契機であったといえる。それまでは、敗戦から国際的地位を取り戻すために経済成長に注力し続けていた。日本だけでなく、周辺の国々、例えば中国や韓国なども同様に経済成長を第一にしていた。その過程でアジア・太平洋戦争において軋轢が生じた日中・日韓の間で国交正常化もなされていった。経済成長のための国際協力などが重視されたためである。

しかし、成熟化すると経済以外の面にも目が向けられるようになった。すなわち、日本の

戦争責任が求められるようになったのである。経済成長によって物的には充足した人々は精神的充足を求め、中国や韓国では日本の戦争責任を追及する声が高まった。従軍慰安婦問題や靖国神社参拝問題が表面化したのが 1980 年代であることからそれは読み取れる。

以来、日本と法的・道義的両方において日本の戦争責任を問い続ける中国や韓国の間における歴史認識問題が存在し続けている。

## 2. 理想社会像・問題意識

私の理想社会像は「安心できる社会」である。安心とは自己肯定感を得られている状態である。自己肯定感を得るためには他者から承認される必要がある。承認とは相手の性質を肯定し、受け入れることである。ここでいう性質には外面的なものも内面的なものも含まれる。また、性質は個人的な性質と集団的な性質との 2 つに分類されることができる。個人的な性質とは 1 人の個人として有している性質のことであり、集団的な性質とは自らが所属する共同体の一員として有している性質のことである。また、承認は継続的且つ相互的になされる必要がある。

私の問題意識は「歴史認識問題」である。ここでいう歴史認識問題とは主に日本、中国、韓国の間でアジア・太平洋戦争に関わる歴史認識に齟齬が生じ、軋轢が生まれている問題のことである。歴史認識問題によって日本人、中国人、韓国人の間において集団的な性質の継続的且つ相互的な承認が阻害されており、これによって彼らは自己肯定感が得られず、安心できていない。以上の状況は私の理想社会像に大きく反する。したがって、私の問題意識は「歴史認識問題」である。

## 3. 現状分析

### 3-1 歴史とは何か

歴史認識問題を論じるにあたって、まずは「歴史」というものが何かを定義する必要がある。歴史とは、「過去の出来事に対する現在の人々の解釈」である。歴史とは過去の客観的な事実である、という見方があるが、これは誤りである。

より詳しく見ていこう。過去の出来事というものは現在に生きる我々が知り得ないものも含め、無数に存在していた。しかし、我々がそれを知るのは残された史料や当時を知る人の話を通じてなされることである。したがって、史料に残されていること、話に上ったこと以外の過去の出来事を我々はどうしても知り得ない。この時点で客観的な歴史的事実には辿りつけない、つまり客観的な歴史的事実はわかりえないといえてしまう。

さらに、史料等から拾い上げられた歴史的事実（と思われているもの）はその内容を吟味され、「この出来事にはこういう意味がある」「この出来事はこういうことである」などと結論付けられて初めて我々に「歴史」として認識される。つまりこの過程においても過去の出来事に対する「解釈」というものがなされている。故に、歴史とは「過去の出来事に対する

現在の人々の解釈」であるといえる。歴史とは客観的な事実ではないのである。上野千鶴子はこの点について以下のように指摘する。

このことを「慰安婦」問題ほど、最近になってドラスティックに示した例はない。たんに「事実」ということなら、「慰安婦」の存在は誰にも知られていた。隠れてさえいなかった。変化したのは「事実」の捉えかたのほうである。だれひとり「犯罪」だと考えていなかった「慰安婦」制度が、当事者がみずからを「被害者」と自己定義することをつうじて、「性犯罪」として再構成されたのだ。もっと正確な言い方をしよう。「加害者」の側がだれひとり「犯罪」だと考えていなかったひとつの歴史的「事実」が、しかも「被害者」の側の沈黙によって支えられてきた「事実」の「信憑性 authenticity」が、「被害者」がそれとは異貌の「もうひとつの現実」を構成することではじめて挑戦を受け、くつがえされたのだ。<sup>1</sup>

従軍慰安婦問題は元慰安婦と称する韓国人女性らが声を上げたことで問題化したという背景があるが、それによって慰安婦という歴史が「非犯罪」から「犯罪」へと、その捉え方に変化が生じたというのである。つまり、「慰安婦」という歴史の解釈が変わったことでその内実にもまた変化が生じたといえる。この上野の指摘は歴史が解釈によって成り立っていることを端的に言い表している。

### 3-2 主な歴史認識問題

歴史認識問題と一口に言っても様々なものが挙げられる。日中間の問題、日韓間の問題日中韓 3 国の間の問題などに分類することもできる。また、純粋な戦時下における出来事への認識問題から、直接戦時下で起きたことではないものの戦後の社会において何らかの形で派生してきた問題もある。例えば歴史認識問題において筆頭に挙げられることが多い南京事件や従軍慰安婦は前者に当たる。いずれもアジア・太平洋戦争の中で実際に起きたとされる出来事が争点になっていると言える。後者に当たるものには、歴史教科書における記述問題などが挙げられる。以下に分類を示す。

名称	概要	主な関係国	主要なアクター
南京事件	1937年、南京入城を果たした日本軍が軍人、民間人問わず当時南京にいた多くの中国人に殺害、略奪、強姦などをはたらい	日本、中国	中国政府

<sup>1</sup> 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』（青土社・1998年）pp.14-15

	たとされる事件。 犠牲者の数は諸説あり定かでない。 中国では「南京大虐殺」とされている。		
従軍慰安婦	戦時中に日本の植民地であった朝鮮、中国、フィリピン、インドネシアなどの女性を軍の性的奉仕に従事させたとされる。 日本軍が関与したもののなか、強制性はあったのかなど、多くの争点がある。	日本、韓国	挺対協
歴史教科書記述問題	日本で使用される歴史教科書の記述を巡る論争。 慰安婦や南京事件などの記述があるか、戦争が「侵略」か「進出」かなどが争点になり、過去何回か問題化している。	日本、中国、韓国	新しい歴史教科書をつくる会など保守系組織

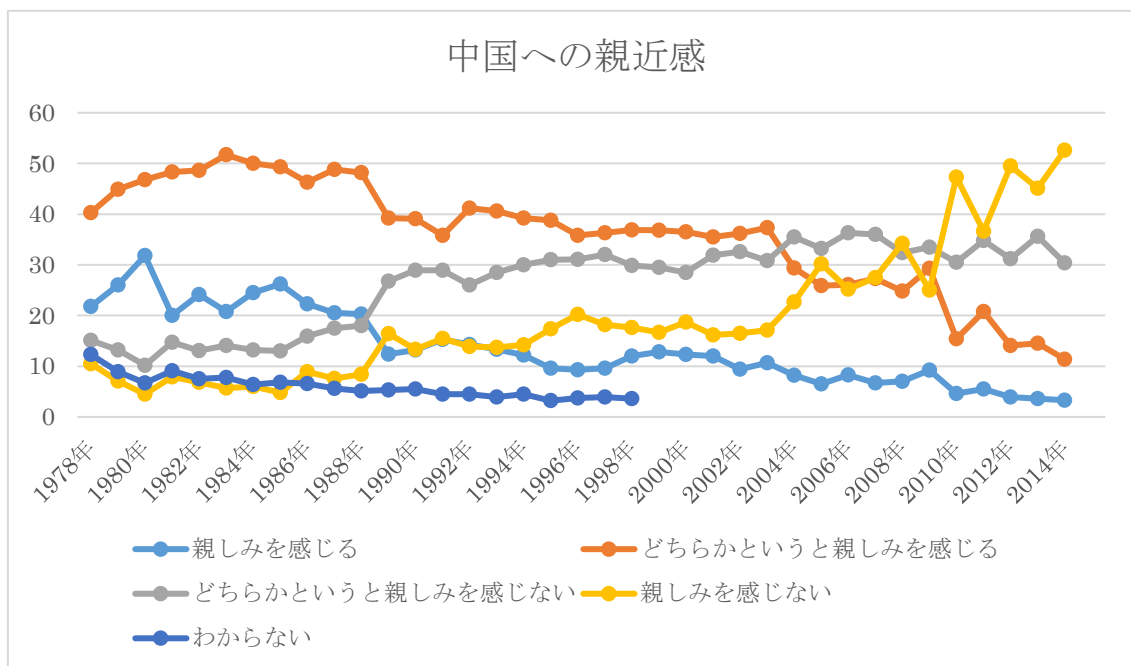
表 1

### 3-3 歴史認識問題による人々の対立

次いで、歴史認識問題によってどのような社会への負の影響が出ているのかを見ていく。グラフ 2 を見てほしい。日本人の中国に対する親近感の推移をまとめたものである。例えば 1986 年には「親しみを感じる」「どちらかというとき親しみを感じる」の項目が共に下降している。この前年、1985 年には中曽根康弘首相が靖国神社に公式参拝して中国から大バッシングを受けた年である。さらに、グラフ 3 は日本人の韓国に対する親近感の推移を表したものである。同じく 1986 年には「親しみを感じる」と「どちらかというとき親しみを感じる」割合は共に低下を見せており、対照的に「親しみを感じない」割合は上昇している。

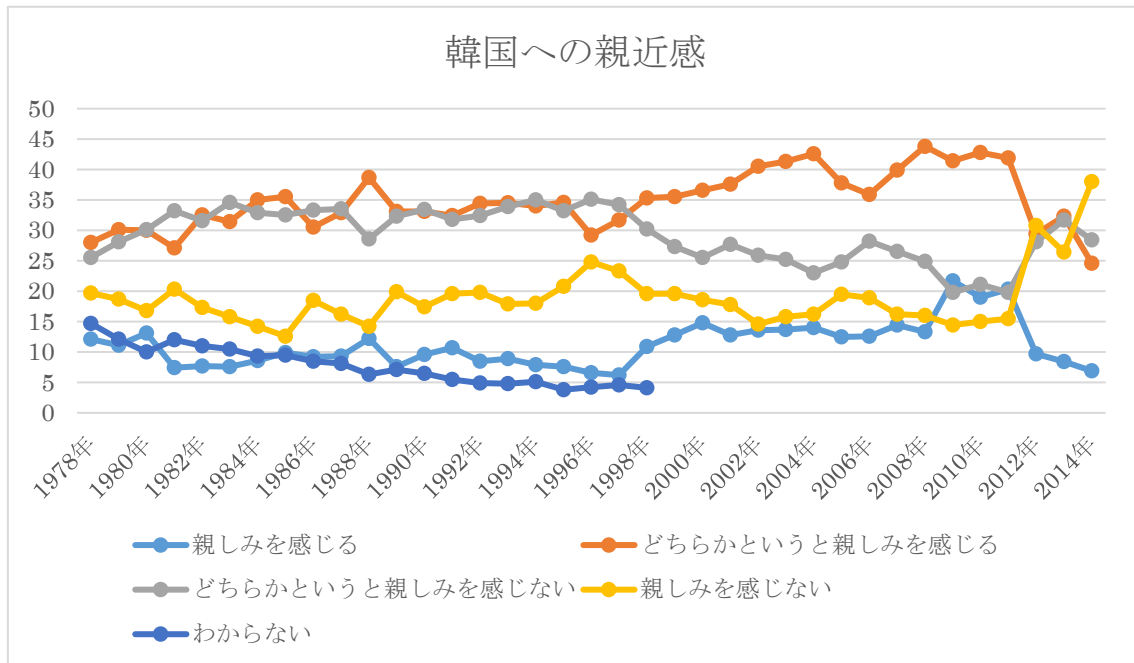
また、韓国への親近感に関しては 2012 年以降も「親しみを感じる」「どちらかというと親しみを感じる」割合が大きく下落しているが、これは 2012 年に当時の韓国大統領・李明博が「天皇が訪韓するのであれば日本の植民地支配からの独立運動で亡くなった方々に心から謝罪するのがよい」と発言した事件の影響を受けていると見られる。

以上のことから、歴史認識問題がいかに人々の感情に負の影響を与えているかがわかる。



グラフ 2 (「わからない」の項目は 2000 年から削除されていたため、本グラフでも 2000 年以降は「わからない」の項目は示していない) <sup>2</sup>

<sup>2</sup> 外交に関する世論調査 [http://survey.gov-online.go.jp/index\\_gai.html](http://survey.gov-online.go.jp/index_gai.html) (2016 年 7 月 2 日閲覧) を参考に筆者作成



グラフ 3 (「わからない」の項目は 2000 年から削除されていたため、本グラフでも 2000 年以降は「わからない」の項目は示していない) <sup>3</sup>

### 3-4 歴史認識問題は国家同士の問題なのか

歴史認識問題は一般に国家同士の文脈上で語られることが多い。たしかに、国の見解や声明に食い違いが見られることがままある点に鑑みれば、そのように考えることもできるであろう。しかしながら、歴史認識問題は本質的には国家同士の問題ではなく、各国国民の、言うなれば世論対世論の問題である。

それを如実に表したのが、2015 年 12 月の慰安婦問題における日韓合意である。通常、国家同士の問題であれば当事国間で合意がなされれば事態は収束に向かう。しかし、この時、慰安婦問題は鎮火するどころか一層燃え上がった。2015 年 12 月 28 日には日韓両外相が慰安婦問題が「最終的かつ不可逆的に解決」されることで合意した<sup>4</sup>にも拘らず、2 日後の同月 30 日には施設を訪れた韓国外務省の次官らに元慰安婦が不満をぶつけた<sup>5</sup>と報じられ、結局現在まで在韓日本大使館前の慰安婦を象徴する少女像は撤去されていないなど両国民の溝は埋まっていない。つまり、歴史認識問題は単なる国家同士の問題に止まらないということがわかる。

<sup>3</sup> 外交に関する世論調査 <http://survey.gov-online.go.jp/index-gai.html> (2016 年 7 月 30 日閲覧) を参考に筆者作成

<sup>4</sup> 毎日新聞「外相会談 『最終的かつ不可逆的に』 解決」(2015 年 12 月 28 日付) <http://mainichi.jp/articles/20151229/k00/00m/010/175000c> (2016 年 8 月 14 日閲覧)

<sup>5</sup> 毎日新聞「日韓解決合意 元慰安婦から反発 韓国次官が合意説明」(2015 年 12 月 30 日付) <http://mainichi.jp/articles/20151230/ddm/001/010/107000c> (2016 年 8 月 14 日閲覧)

### 3-5 歴史認識問題はなぜ問題化しているのか

では、なぜ歴史認識問題はここまで問題化しているのか。問題の内容によって多少の差異はあるものの、歴史認識問題の概ねの構造は中国や韓国（の国民）が、日本の過去の出来事に対する謝罪や反省を求めているというものである。しかしながら、日本政府は例えば南京事件であれば被害者数の認定は困難としつつも日本軍の南京入城後、非戦闘員の殺害や略奪行為があったことは否定できないとの立場を示している<sup>6</sup>し、従軍慰安婦にしても日本軍の関与と「お詫びと反省の気持ち」を表明するいわゆる「河野談話」を継承しており<sup>7</sup>、少なくとも一定程度中国や韓国の言い分を受け入れているといえる。

それでもなお問題が解決していないのはなぜか。原因に、歴史認識問題を「問題化」させているアクターの存在がある。それは1国の政府の場合もあるが、国家でなく民間の組織であることもあれば、政治家個人の場合もある。

具体的な話に移ると、南京事件に関しては日本政府と中国政府の間における問題といえる。南京事件の争点は主に「被害者数」であることが多いが、この見解が各国政府で異なっている。この点に関して日本政府の見解では前述の通り「被害者数の認定は困難」としており（なお、日本国内の学説ではばらつきはあるものの、4万～20万人程度が定説となっている）、対して中国政府は30万人以上の犠牲があったとの見解を有している。また、いわゆる南京事件が「虐殺」に当たるのか、当時の国際法上合法であったのか、という点においても見解が異なっており、これらの相違が後述する歴史教科書記述問題にも繋がってくる。以上の点から、南京事件を問題化させているのは中国政府と日本政府といえる。

従軍慰安婦に関しては前述の通り政府間では合意がなされている。しかしながら世論ベースでの対立は全くといっていいほど解決されていない。これには政府以外の、世論を扇動するアクターの存在がある。それが韓国挺身隊問題対策協議会（以下、挺対協）である。在韓日本大使館の前に慰安婦を象徴する少女像を設置したのをはじめ、デモやマスコミ等を通じて日本を非難している。本レジュメでも度々触れている日韓合意の際も猛反発を見せ、日本政府のみならず、韓国政府までも批判の対象にしている。日本側が合意の際に韓国政府に要請した慰安婦像撤去がなされていないのも、この挺対協の存在が背景にある。

歴史教科書記述問題に関しては、主要なアクターとして、新しい歴史教科書をつくる会（以下、つくる会）や自由社などの保守系の市民団体・出版社の存在が挙げられる。歴史教科書記述問題は過去数回にわたって問題化と沈静化を繰り返してきたが、問題化する時は主に教科書検定においてそういった保守系の団体が発行に携わった教科書が認可された時である。これらの教科書は実際の採択率は非常に低い（つくる会の教科書の採択率は2001

---

<sup>6</sup> 外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taisen/qa/> （2016年8月14日閲覧）

<sup>7</sup> 外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taisen/kono.html> （2016年8月14日閲覧）

年には 0.039%、2005 年には 0.4%と著しく低い水準である) 8。しかしながら、相手国の世論には大きな影響を与えてしまっている。下の表 4 は日本の歴史教育に関する韓国の世論調査の結果を示したものである。韓国や中国と比べて日本は自国・自民族中心の歴史解釈の傾向が強いと認識されていることがわかる。だが、先ほども示した通り、日本では確かに保守系のイデオロギーが反映された教科書も検定を通過してはいるが、実際の採択率はかなり低い水準で、一般的に普及しているとは言い難い状況である。それでもなお、このようなイメージがされてしまうのは、保守系歴史教科書の検定通過が与えているインパクトの強さの表れであり、それゆえに保守系の市民団体や出版社が歴史教科書記述問題を歴史認識問題たらしめているといえよう。

	韓国	日本	中国
とても強い	17.3	65.0	59.1
やや強い	48.6	32.6	36.7
普通	29.9	2.1	3.9
やや弱い	2.7	0	0
とても弱い	0.9	0.1	0.1
評価できない	0.7	0.1	0.1

表 4 自国・自民族中心の歴史解釈の傾向<sup>9</sup>

#### 4. 原因分析

##### 4-1 歴史構築の過程

なぜ歴史認識問題というものが起きてしまうのか、それを考えるためにはまずいかにして歴史が構築されるのかを知らなければならない。

3-1 でも触れたが、歴史とは主観の産物である。過去において何が起きたかを現代の人間が知るには史料や遺跡、遺物、当時の人々の記憶など、要するに当時の状況を伝えられる「媒体」が必要である。即ち、歴史を構築するに当たってはまず史料などの媒体を「選ぶ」作業があり、その後その媒体を「読み解く・解釈する」という作業があることになる。

8 辛珠柏「韓日歴史教科書問題の史的見解（1945～現在）—1982年と2001年の展開様相を中心に—」[http://www.jkcf.or.jp/history\\_arch/second/4-09j.pdf#search=%27%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E6%95%99%E7%A7%91%E6%9B%B8%E8%A8%98%E8%BF%B0%E5%95%8F%E9%A1%8C%27](http://www.jkcf.or.jp/history_arch/second/4-09j.pdf#search=%27%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E6%95%99%E7%A7%91%E6%9B%B8%E8%A8%98%E8%BF%B0%E5%95%8F%E9%A1%8C%27)

9 南相九「日韓の歴史教科書の日本軍「慰安婦」記述と相互理解」<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/43828/1/pas011005.pdf#search=%27%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E6%95%99%E7%A7%91%E6%9B%B8%E8%A8%98%E8%BF%B0%E5%95%8F%E9%A1%8C%27> を参考に筆者作成



#### 4-2 歴史構築の恣意性

前項で歴史がどのように構築されるかは明らかにできた。その上で、その過程にいかに関の影響が、すなわち恣意性というものが関わってくるのかを明らかにしたい。

前項において、歴史構築の過程には史料などの媒体を「選ぶ」作業と「読み解く・解釈する」作業があると述べた。通常、複数の選択肢がある中で何を選ぶかは選ぶ主体の主観に左右される。歴史構築もその例外ではない。E・H・カーは次のように指摘している。

むしろ、事實は、広大な、時には近よることも出来ぬ海の中を泳ぎ廻っている魚のようなもので、歴史家が何を捕えるかは、偶然にもよりますけれども、多くは彼が海のどの辺で釣りをするか、どんな釣道具を使うか—もちろん、この二つの要素は彼が捕まえようとする魚の種類によって決定されますが一によるのです。全体として、歴史家は、自分の好む事実を手に入れようとするものです。<sup>10</sup>

つまり、どんな媒体が選ばれ、読み取られ、解釈されるのかはその主体たる歴史家がどのような歴史を構築したいか、という主観に左右されるといえる。例えば、南京事件であれば、日本軍の内部資料、中国政府の内部資料、軍人の日記、現地住民の証言、現地にいた外国人ジャーナリストが残した記録や写真など、関連する史料は多岐に渡る。保守的な思想を持った日本人ならより少ない被害者数が記録された史料や虐殺を否定するような内容の証言を採用するであろうし、逆の思想を持った人であれば日本軍が大量の民間人を殺害したことを示す史料をこぞって使おうとするであろう。そうなれば、当然、そこから得られる結論、ここでは歴史の解釈にも変化が生じることは想像に難くない。

#### 4-3 パブリック・メモリーとしての歴史

では、なぜ歴史には恣意性が介入してしまうのだろうか？それを考える手がかりになるのが、パブリック・メモリーという概念である。入江昭は比較的最近の歴史を見る場合、歴史には3つの意味がある<sup>11</sup>としたうえで、次のように指摘している。

例えば、ご承知のようにスミソニアン博物館における原爆投下に関する展示会が、最近問題になった。あれによっても分かるように、アメリカは正しい戦争をしたというパブリック・メモリーがあるから、原爆投下も含めてすべてを正当化しようとする意識が強い。だから一般に昔の歴史のことを知らない人でも、こういった国としてお

<sup>10</sup> E・H・カー『歴史とは何か』（岩波書店・2015年）p.29

<sup>11</sup> 入江昭「太平洋戦争とは何だったのか」<http://www.nids.go.jp/publication/senshi/pdf/199903/03.pdf#search=%27%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E3%81%8C%E6%8C%81%E3%81%A4%E6%84%8F%E5%91%B3+PDF%27>（2016年8月20日閲覧）

歴史観というものは身に着けているから、正義のための戦いに勝つためにいかなる手段を使っても正当化されるべきだという意識があり、したがって原爆を落としたということに対してもそれ程アメリカの意見が分かれているわけではない。このようなことから、国としての過去についてのはっきりした、見解、その政治的な意義が分かる。<sup>12</sup>

アメリカの例を挙げながら、要するにパブリック・メモリーというものがあるからこそ今ある共同体（ここではアメリカ）の過去の正当性を主張することができる。言い換えると、共同体の過去を正当化するための役割を歴史が担っているのである。

過去の正当化というものが意味するものは、即ち現在あるものの正当化につながる。それだけ正当なプロセスを歩んできた以上、今あるものも正当なものであると言えるからである。つまり、歴史の価値は現在を正当化することができるという点なのである。

さて、では忖意性の話に戻ろう。人間は基本的には現在の自分や自分が置かれている環境を正当化する傾向がある。存在価値を見出そうとする。それは主体が共同体であっても同様である。共同体は構成員を束ねなければならない以上、むしろ個人よりもその傾向が強くてもおかしくはないくらいである。ここでもし共同体の過去の歴史が著しく否定的なものであったなら、そのようなプロセスを経た現在も当然正当化することが難しくなってしまう。

だからこそ、過去、つまり歴史を構築する段階で現在から見て正当だと思えるような材料を揃えようとする—そう、忖意性が介入してくるのがある。つまり、歴史が過去の正当化、さらにそれが現在の正当化に繋がるがゆえに、歴史に忖意性というものが介入するのである。

## 5.政策

### 5-1 新歴史科目「近現代史」設置

歴史認識問題解決に向けた政策はおおまかに言えば教育改革になる。歴史というものが主観の産物であること、それゆえに忖意性というものが簡単に介入してしまい、それが日中韓の歴史認識問題を引き起こしている以上は人々の意識改革が必要になってくる。歴史が主観的なものであることを十分に自覚した上で様々な観点から見つめてみる、ということをして全ての人々がやればよい、という話になるがそれは現実問題困難を極めると言わざるをえない。世の中の人間を全員歴史博士のようにすると言っているようなもので、到底不可能である。

しかしながら、小中学校や高校などで歴史を学ぶ機会は少なくとも日本においてはほぼ全ての国民に担保されていると言えよう。つまり、可能な限り多くの人々に歴史に触れ、考えてもらうには学校における歴史の授業が適しているのである。

そこで、1点目の政策として従来の「日本史」「世界史」とは別に「近現代史」を歴史科

---

<sup>12</sup> 同上（2016年8月20日閲覧）

目として設置する。政府は最近になって高校の「日本史 A」と「世界史 A」を統合した「歴史総合」という新科目の設置と必修化する方針を示したが<sup>13</sup>、これとは内容が異なる。本政策はこれと同じ方向性を取りつつ、さらに歴史認識問題解決に資する内容にしていく。

では具体的な話に移ろう。日本の歴史において一般的には明治期～現代が近現代として扱われている（なお、現在の高校の「日本史 B」の範囲は半分以上が近現代である）。本政策はこの近現代を従来の歴史科目から独立させ、教科書なども新しくしたうえでより詳しく明治以降の日本の歩みを学べる内容にする。さらに、従来「日本史」と「世界史」に分かれていたものを統合し、「世界情勢の中の日本の歴史」を扱う内容にする。代わりに従来の「日本史」や「世界史」の範囲は前近代までとする。

世界情勢の中の日本を見ることにより、従来は日本からの視点のみで語られていた歴史を他の国や地域の視点から見ることが可能になる。つまり、多角的な視点から歴史を見るという姿勢を生徒に教えるとともに一面的な歴史の見方に止まるということを防ぐことにも繋がりうる。

さらに、従来の歴史科目とは異なる点がもう 1 つある。本政策においては戦後から現在に至るまでの歩みにも重点を置くこととする。従来、例えば日本史であれば、教科書には確かに現在なら東日本大震災や自民党の政権奪還くらいまでは一応教科書に記載されている。しかしながら、現代社会など公民科目などとも内容が重なっていることもあって教科書で割かれているページ数も他の時代より少なく、細かい内容が授業で扱われないこともしばしばある。本政策ではこの点も改善していく。

なぜ、戦後なのか。それは、日本が敗戦後に中国や韓国をはじめとするアジア・太平洋戦争時の関係国、とりわけ日本が残念ながら多大なる被害を与えてしまった国々に対して戦後補償や関係改善などをなしてきた期間であるからである。1945年8月で歴史が終わってしまおうものなら、それこそ自虐史観と呼ばれるような、日本が悪者であるというイメージにしか繋がらない。より大切なことは、その後それをどう清算し、乗り越えてきたのか、である。事あるごとに政府が発表する談話にある「お詫びと反省」を日本がどのようにやってきたのかを知ることで、そこから読み取られる歴史は単なる「自虐史」ではなくなる。

日本以外の国の目線を取り入れて歴史認識問題による中国や韓国の感情悪化を防ぐとともに、ただ他国に配慮するだけ、という姿勢は取らないようにすることで「自虐史観」を嫌う日本人の感情にも配慮した形の歴史科目が出来上がるのである。

## 5-2 教科書検定新条項「戦争被害者の声条項」設置

本政策は歴史認識問題解決に向けた教育改革の 2 つ目で、上述の「近現代史」の補完的政

---

<sup>13</sup> 日本経済新聞「高校で近現代史必修に 文科省、次期指導要領で骨格案」（2015年8月6日付）[http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG05H7L\\_V00C15A8EA2000/](http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG05H7L_V00C15A8EA2000/)（2016年8月20日閲覧）

策とも言える。

現在、教科書検定制度において歴史科目に関しては「近隣諸国条項」というものが存在する。「近隣のアジア諸国との間の近現代の歴史的事象の扱いに国際理解と国際協調の見地から必要な配慮がされていること」という内容で、1982年から使用され続けている。

しかし、実際には中国や韓国の感情を刺激するような内容のものも検定を通過しており、効果は不十分と言える。

本政策において、教科書検定に新たな条項を定める。それが、「戦争被害者の声条項」である。アジア・太平洋戦争に関連する内容、例えば南京事件や従軍慰安婦のような特に関連国との間で深刻化している歴史事象の記述に際しては被害者の経験談の引用を内容に盛り込むことを義務づける。

これは保守的にせよ革新的にせよ、記述の内容が両極端な教科書が検定を通過し、中国や韓国の感情を刺激してしまうことを防ぐためである。

南京事件は全くなかった、逆に犠牲者が30万人以上出たなどの極端な記述は往々にしてその時現場にいた（とされる）経験者の声を無視している。例えば前者に関して言えば旧日本兵であっても「現地の人を殺せと命じられた」などと証言していることはあるし、後者に関して言えば南京で死体の処理を任されたことがある人の証言を聞けば30万人以上の人間の死体が南京事件が起こったとされる期間内に処理されきるとはおよそ思えない。

いわば戦争被害者のオーラルヒストリーを重視することを求める政策である。